

1

“アジアの
渡り鳥”
伊藤壇
誕生の
プロローグ

挫折知らずの
スポーツ万能少年が、
“アジアの渡り鳥”
としてはばたくまで

やるからには一番を狙う

一九七五年十一月三日、僕は北海道の札幌で生まれました。小さな頃から運動は得意で、両親が二十代前半にできた子どもということもあり、いろんなスポーツを一緒になつて体験したり、教えてもらったりして育ちました。

小学校二年生で野球を始めるとすぐにピッチャーを任されたので、運動のセンスは悪くなかったでしょう。当時は読売巨人軍の全盛期。近所の子どもはみんなジャイアנטスの帽子をかぶっているような時代でしたから、スポーツといえば当然野球です。三年生になると、サッカーとアイスホッケーも始め、三つを掛け持ちすることになりました。サッカーはこの時代の定番『キャプテン翼』の影響から。一方のアイスホッケーは、近所に住む一つ年上のお兄さんから誘われたのがきっかけです。

ところが、実際にスポーツを三つ掛け持ちしてみると、試合の日が重なることが度々あり、やりくりが難しくなってきました。そこで悩んだ結果、冬場に雪で試合ができなくなる野球をやめることにしました。監督さんが毎日家まで来て、「もう少しやってみないか？」とか「ヒマな時でいいから、練習に来てくれないか？」と最後まで熱心に誘ってくれたので、あのまま残っていたら、僕はアジアで野球をしていたかもしれません（笑）。

北海道は冬になると雪が積もり、外で行うスポーツはできなくなってしまう。しかし、幸いなことにサッカーは、冬場に体育館でできるサロンフットボールという、ちょうど今のフットサルの前身みたいな小さなボールで行うゲームをやっていました。また、アイスホッケーは札幌市内にチームが三つあり、年中使用可能なリンクも三つ四つあったため、どちらも年間を通してプレーできたのです。

小学校の頃の僕は、家が学校の目の前にあつたこともあり、家で遊ぶことはせず、サッカーとアイスホッケーのない日は、いつも学校のグラウンドや公園で、缶けりや鬼ごっこなどをし、友達を束ねて遊ぶガキ大将でした。しかも、すばしこかったので、遊ぶ時も同じ学年

だけでなく、上級生に混じってサッカーをしたりすることもありました。そういった上下の関係をうまく渡り歩く経験は、その後のサッカー選手としての立ち回りにも生きているような気がします。なにせ、すぐ上の世代が第二次ベビーブーマーですから、学校や公園、団地など、街中いたるところに子どもがあふれていました。僕は一人っ子なので、兄弟がいない分、そういった近所のお兄さんやお姉さんにずいぶんかわいがってもらいました。一方、いわずら小僧を絵に描いたような少年でもあり、児童会長までつとめたのに、覚えているだけで校長室に三回も呼び出された経験があります（苦笑）。

サッカー、アイスホッケー、どちらも始めるとすぐにうまくなりましたが、実はサッカーよりもアイスホッケーのほうが先に芽が出ました。小学校四年生で札幌選抜のメンバーに選ばれ、六年生の時に、当時、三強と言われた苦小牧、釧路、帯広を下して、札幌選抜が全国初優勝を果たしたのです。決勝戦で二点を取った僕は優勝の立役者として、注目を集めます。ところが、小学校で日本一を達成したことで、そこから先は、少し目標を見失ってしまい、結局アイスホッケーはサッカーのトレーニングの一環として続けていました。一方のサッカーは、やはり同じように札幌選抜に選ばれましたが、全国大会に進むことはできません

でした。

全国レベルで知られていたアイスホッケーではなく、あえてサッカーの道を選んだのは、単にサッカーが好きということに加え、小学校六年生の時に経験した海外のサッカー選手との交流に原点があります。

札幌は当時の西ドイツのミュンヘンと姉妹都市の提携を結んでおり、その年は、ミュンヘンからサッカーの選抜チームを迎え、札幌選抜との親善試合やホームステイを通して両都市間の交流を図るイベントがあったのです。

ミュンヘンの選手は札幌選抜との親善試合をした後、二人ずつ各家庭に分かれてホームステイすることになっており、僕の家もその一軒にエントリーしていました。うちにはアレックスとデイディという二人の選手が来ました。他の選手はみなドイツ語しか話せなかったようですが、アレックスは、もともとアメリカからの移民だったらしく、英語が話せたので、両親とは英語で会話をしていました。僕も学校の先生に英語を教えてもらったり、辞書で調

べたりして、アレックスにいろいろ話しかけ、彼が帰った後も文通をしたりしました。

彼らを通して見えてきたのは、「世界のサッカーは、日本のサッカーよりすごいらしい」ということでした。当時の日本には、Ｊリーグも当然なく、実業団で構成された日本サッカーリーグしかありません。小学生の僕は、日産自動車サッカー部の木村和司さんや、水沼貴史さんにあこがれていて、卒業文集にも「将来はサッカーで日産自動車に入りたいです」と書いたくらいです。

ところが、日本のサッカーは野球に押されっぱなしで、ほとんど盛り上がっておらず、テレビで試合を目にすることもたまにしかありませんでした。一方、世界のサッカーはどうやらそうではなく、ヨーロッパのリーグには、たくさんの方が熱狂するチームや選手がいることを知ったのです。

サッカーとアイスホッケーを掛け持ちでプレーしていた僕は、どちらもチームの中で頭角を現し、札幌選抜に選ばれるようになっていました。将来の夢や、自分の未来像をおぼろげに考え始めていた僕は、いずれどちらかを選択しなくてはならないことにうすうす気づいて



うちにホームステイしたミュンヘン選抜の少年たち。手前がディディ、奥がアレックス。

いましたし、本当に好きなのはどっちなのか、向いているのはどっちなのか、考えるようになっていました。

そんなタイミングで、サッカーのU-12の日本代表候補として合宿に呼ばれるというチャンスを得ます。ところが、そこで感じたのは、全国トップレベルの選手と、自分の技術の埋めがたい差でした。

「やるからには一番を狙う」

これが僕の子どもの頃からのモットーです。アイスホッケーはすでに頂点を経験したけれど、サッカーはどうか。自分の所属している

チームは札幌では強いけれど、全国で戦えるほどではない。ならば、もっと一生懸命サッカーに取り組んで、合宿で会った人たちに負けないように頑張るべきではないのか……。

その瞬間、僕はアイスホッケーではなく、サッカーで一番を目指す道を選んだのです。

あえて自分に厳しい選択をする

小学校三年生で始めたサッカーとアイスホッケーは、両方とも中学まで続けました。すると、高校進学の際にタイミングになって、アイスホッケーの強豪校から次々とオファーがきました。中には、夏はサッカー部、冬はアイスホッケー部で活動してもよいという条件を提示してくれる高校もあったくらいです。しかし、高校に進学したらアイスホッケーではなく、サッカーをすると決めていたので丁重にお断りし、サッカーの特待生として迎えてくれる高校に行くことにしました。その頃、高校サッカーの北海道代表といえば、室蘭大谷高校。その

ままそこへ進学し、レギュラーになりさえすれば、ほぼ全国大会の切符は手にできます。ところが、僕はあえて万年二位だった兄弟校の登別大谷高校を選びました。そして、「自分が全国大会の扉を開く」と心に誓ったのです。

僕が登別大谷高校へ進学すると聞いて、ほとんどの人が、「室蘭大谷の間違いではないのか？」とか、「どうして登別なんだ？」と聞いてきました。しかし、自分の中ではきちんと理屈が通っていました。なぜなら、優勝が約束されているようなところへ入るよりも、自分の力で万年二位のチームを優勝に導いたほうが、やり甲斐も達成感もあるからです。今振り返ると、さすがに自分でも無謀なチャレンジだったと思うのですが、とにかく当時の僕はそれに高校三年間を賭けると決め、自分の心の甘えを断ち切るために、親や周りに「おれは登別大谷で全国へ行く！」と宣言してしまいました。

結果的には、一年生ではレギュラーになれず、チームも敗退。二年生でレギュラーになれたものの全道制覇は逃し、三年生の時に念願の全道制覇、登別大谷高校初の全国高校選手権大会出場を果たしました。

そもそも札幌の出身なので、普通に考えたら札幌の高校でサッカーの強いところに行くのがセオリーだと思います。しかし、自分の中にはサッカーをやる以上、北海道で優勝したい。それも、優勝がほぼ約束されている高校ではなく、自分たちの力で成し遂げられる高校に行きたい、という強い思いがありました。ただ、登別は札幌に比べたらだいぶ田舎です。そこで僕はこう考えました。自分の性格上、札幌の高校に行ったら、サッカーもやるだろうけれど、部活が終わった後は友達と遊びに行ったり、彼女とデートしたり、ごはんを食べたり、映画を観に行ったりして、きつとサッカーがおろそかになってしまいうだろう。ならば、あえて田舎に行き、自由な行動の取れない寮に身を置いて、サッカーしかない生活を送ったほうがいい、と。

思い返してみると、こういった「あえて自分に厳しい選択をする」考え方は、子どもの頃から習慣化していたようです。というのも、僕の親は小さい頃から「ああしなさい」「こうしなさい」ということを言わず、「自分の好きなことをしなさい」「よく考えて自分でやりなさい」と、僕の考えた結果を尊重してくれる人たちでした。そう言われてしまうと、かえっ

て中途半端な結論を出したり、途中で投げ出したりすることができなくなるから不思議です。子どもの頭なりに、ちゃんと最後までやり遂げる方法を考え、それを実行に移す癖がついたのは、親のおかげです。そして、今アジアでサッカーを続けていく中でも、この思考パターンはとても役立っています。

親に「途中で絶対に投げ出さない」と約束し、札幌から約百二十キロ離れた場所で寮生活がスタートしました。サッカー部の兼田謙二監督の指導はとても厳しく、一年生の僕は全く試合に出られませんでした。試合に出るためには、登録メンバー二十名の中に入らなくてはならないのですが、僕はそのボーダーラインのあたりをウロウロしていたからです。しかも、二十名の枠の中には、あきらかに「大人の事情」で入っている選手もいて、当時はそれに納得がいかず、鬱屈した気持ちを抱えながらグラウンドに出ていました。しかしある時、「そんな選手たちが気になっているのは、まだ自分の実力がボーダーラインすれすれにいるからじゃないか。もっとうまくなって、ぶつちぎりのレギュラーになってしまえば、彼らのことなど気にもならないはずだ」と気がついて、そこから一気に気持ちを切り替えました。その日から毎日三年間、一日も休まず一人で朝練習をするようにしたのです。

練習の成果がすぐに現れるほど世の中は甘くありませんが、欠かさず毎日朝練習を続けて
いる姿が監督の目に留まったのか、二年生で試合に出られるようになりました。能力に応じ
たレギュラー入りというよりは、「毎朝頑張っているから試合に出してやろう」という監督
の温情だったんじゃないかと思います。しかし、試合に出させてもらえさえすれば、あとは
結果を残していくだけです。そこから更に貪欲にサッカーに取り組んで、不動のレギュラー
の座を二年生で手に入れました。残念ながら二年生の高校サッカー選手権北海道大会は決勝
までたどり着けず、敗退。高校最後の三年生で臨んだ第七十二回大会で、ついに北海道大会
を制し、全国大会初出場の切符を手に入れました。奇しくも北海道大会の決勝戦の相手は室蘭
大谷高校。僕は自らの決勝ゴールで常勝の兄弟校を破り、中学校三年の進路決定の際に口
にした誓いを、現実のものとなりました。全国大会では三回戦の東福岡高校に敗れたものの、こ
の試合で放ったミドルシュートが大会のベストゴールに選ばれ、遅ればせながらサッカーで
も全国区の仲間入りを果たすことができましたのです。

登別大谷高校が高校選手権全国大会へ進んだのは、これが最初で最後でした。というのも、

二〇一三年三月に室蘭大谷高校と統合され、廃校になってしまったからです。サッカー部最後の公式戦は僕も観戦し、兼田監督の最後の采配を見つめました。監督がいなければ、今の僕はないし、登別大谷がなければ、プロサッカー選手としてこの年までプレーを続けることはできなかったと思います。その場所がなくなってしまったのは、とても切ないことでした。また、海外でプレーする自分にとっては、オフで帰国した時に顔を出し、コンディションを保つこともできる大切な拠点でもありました。心のふるさとであり、体のベースキャンプでもあった母校を失ったことは、後に、アジアでサッカーをして生きていく選手たちのケアを担う「チャレンジャース・アジア」設立へのきっかけにもなっています。

さて、高校卒業後にJリーグへ進むという道もありましたが、何かあった時に潰しがきくようにと思い、全国大会の前に仙台大学への進学を決めていました。僕が通っていた当時の仙台大学は体育大学だったため、最悪の場合は体育の先生になって生きていこうという考えだったのです。サッカーを続けながら、きちんと教育実習にも行き、無事に履修もできたので、プロサッカー選手としては割と珍しく、僕は体育教師の教員免許を持っています。

解雇を言い渡された瞬間は

頭の中が真っ白

日本プロサッカーリーグ、いわゆるJリーグが開幕したのは一九九三年、ちょうど僕が高校生の時でした。一部リーグのみの十チームしかなく、選手として入るのは非常に狭き門でした。

実は、高校三年生の夏、兼田監督に「Jリーグに行きたい」と言ったことがあります。しかし、まだ全国大会出場も決まっておらず、これといった結果も残せていなかったため、「おまえじゃむりだ」と即答されました。兼田監督はサッカーに関してはとても厳しい人で、練習などと思うように体が動かない時に「体の調子が悪い」と言おうものなら、「それがお前の実力だ」とぼつさり切り捨てられたことをよく覚えています。そんな監督が即答したわ

けですから、しょうがないかと、監督が勧めてくれた仙台大学のセレクションを受けに行きました。受験者は五百人もいて、とてもじゃないが、これは難しいと思っていたところ、わずかに五名の合格者に選ばれたので、そのまま進学することになったのです。

その時、Jリーグに進んでいたら、また別の人生があったのかもしれない。というのも、Jリーグ発足からしばらくたつと、ある種のバブルみたいになってしまい、高卒の選手が大量に採用されたのです。中には、契約金と報酬でいきなり高級車を買って乗り回すみたいなこともちらほら聞こえてきました。これはまずいということで、契約のルールが見直されたのが、ちょうど僕の大学卒業時期でした。高校卒業当時の甘い採用期間から一転、大学卒業時には多くの選手がJリーグへ行けないという氷河期を迎えてしまったのです。しかも、当時は大卒と高卒とで給料にも大きな開きがあったため、採用するなら給料の安い高卒のほうがいいということで、大卒のサッカー選手には非常に厳しい時期でした。ちなみに今は、年俸や契約金の高騰をなるべく抑え、クラブの経営を安定させる目的で、年俸の上限や人数制限を設けたA契約、B契約と、試合出場時間数が一定の基準に満たない選手が契約できるC契約の三種類が用意されており、大卒の選手でも採用されやすくなっています。

卒業後は地元札幌のコンサドーレ札幌に入りたかったのですが、その年の大卒採用はないと言われ断念。十一月にあったインカレでも初戦で福岡大学に敗れてしまい、どこからもオファーをもらうことができませんでした。プロサッカー選手になることを諦め、体育の教師として部活でサッカーを教えて生きていくことも考えないといけないのかな……そう思い始めた矢先、^{やさき}知人の紹介で、ブランメル仙台のセレクションに参加するチャンスを得ました。ブランメル仙台とは天皇杯の予選で戦って敗れたものの、仙台大学の一点は僕がカウンターで決めたゴールでした。それを見ていたブランメル仙台の当時の監督が僕のことを覚えていて、人づてに連絡が来たことでセレクションの扉が開いたのです。僕はセレクションでしたり結果を残すことができ、さらに他大学のサッカー部監督からの推薦もあつて、一九九八年、ブランメル仙台でプロサッカー選手の道を歩み始めました。

ブランメル仙台は二年目にJ2に上がり、チーム名をベガルタ仙台に改称。J1昇格を目標に掲げたチームの士気は目に見えて上がっていました。僕はルーキーとして入った一年目、開幕戦からスタメン出場し、リーグ戦二十三試合に出場。二ゴールを決めるなど順調な滑り

出しましたが、二年目は開幕戦からケガのために出遅れていました。リーグ戦前半の不調を理由に監督が交代し、ケガから復帰した僕にも出場の機会が巡ってきます。期待にしっかりと応えなくてはいけない。そう意気込んで迎えた久しぶりのスタメン出場は、ホームの仙台スタジアム（現ユアテックスタジアム仙台）でした。

八月に入り、仙台でも連日二十五度を超える夏日が続いていました。いつもより早めに布団に入った僕は、翌朝、カーテン越しに入ってくる太陽の光に気づいて目を開けます。

「やけに明るいな」

時計に目をやると、針はクラブハウスの集合時間をさしていました。

慌ててマネージャーの携帯に電話をしましたが、万事休す。

「もうこなくていい」と冷たくあしらわれ、一か月の自宅謹慎の後、練習には参加させてもらったものの、試合に出してもらうことはできず、その年に解雇となりました。チームには

何度も謝りに行きましたが、以前にも寝坊をしていたことや、前シーズンJ2最下位を立て直すために監督が替わったタイミングだったこともあり、こいつよりも、真面目で若い選手をとったほうがチームの戦力になるだろうと判断されたのかもしれない。いずれにせよ、「寝坊でプロサッカー選手がクビ」というのは、その後の自分に大きなショックと影響を与えたことは間違いない。特に、解雇を言い渡された瞬間は、本当に頭の中が真っ白になりました。これからもきつと忘れることはないでしょう。

サッカーで作った借りは、 サッカーでしか返せない

今思い返してみると、ベガルタ仙台に入るまで僕は本当の意味での挫折らしい挫折を経験したことはありませんでした。小さな困難や、ある程度の苦しみに似たものはありました

が、壁にぶつかってもその壁を乗り越えると、大きなボーナスが手に入り、さらに次の道が見えるという感じだったのです。その状態が当たり前になってしまっていたのでしょうか。サッカーだけやっていれば、自動的に道が開けてくるわけですから。

他の人が簡単に手にすることができないポジションにいることも忘れ、居心地のいい環境に甘えていたのかもしれませんが。

自分にとってサッカーはあまりにも身近で、あるのが当たり前だと思っていただけに、解雇されてからの自分は、頭も心も空っぽでした。他のチームに移籍してサッカーを続けることも考えましたが、解雇の理由が理由であるだけに、オフアームもないし、そういう噂は広まるのも早いものです。この後、何をやらなければならないのか、完全にわからなくなってしまいました。当時の自分は、今から考えたら本当に何も自分でできない人間になっていて、電話一本かけて「サッカーの練習をさせてください」とか「どこかチームを紹介してください」と他人に頭を下げることですらできなかつたのです。

所属するチームがなくなった喪失感とプライドだけが残り、抜け殻のようになった自分がそこにいました。

仕方なく札幌へ戻りましたが、実家で両親と一緒に暮らしていたので、毎日が針のむしろに座る心持ちでした。親の視線は痛いし、状況をよく知らない周りの人たちからは「いつテスト行くの?」とか「次のチームは決まった?」とか善意で声をかけてくれるからです。さすがにこのままでは体がなまってしまうと思い、札幌のアマチュアのサッカーチームに所属してみました。給料が出るわけではないので、何らかのアルバイトをしないと生活ができません。貯金を切り崩しながら生活するのも段々厳しくなってきました。アルバイトを始めてみましたが、バイト先へ向かう途中で車をぶつけてしまい、修理代の分でききなり赤字……という具合でした。解雇のきっかけとなった寝坊のシーンがフラッシュバックすることもあって、その度に、お酒を飲みに行ったり、友達に会ったりして気を紛らわそうとしましたが、全部ダメでした。

結局、サッカーで作った借りは、サッカーで返さないかぎり前へは進めないんだと気づい

て、再び現役でサッカーを続ける道を探り始めます。ここまで、解雇されてから約一年の月日がたっていました。

ある日、たまたま手にしたサッカー雑誌の記事に目を奪われます。そこには、シンガポールのサッカーチームが外国人選手を探していると書いてありました。シンガポールは大学三年生の時に家族旅行で行ったことがあり、人や街の雰囲気も知っていたので、そこでサッカーを続けられるなら、それもいいかと、久しぶりにポジティブに捉えている自分がいました。小学校の時、ミュンヘンの選抜チームと札幌でサッカーをした後、「僕もいつか海外でサッカーをしたい」と願った気持ちを思い出し、これは夢をかなえるチャンスかもしれないと、テストを受けることにしたのです。

二〇〇〇年の十二月、町田で行われたテストには、アマチュアや大学生など、総勢三百名ものサッカー選手が集まりました。アジアのチームにこれだけの日本人が集まったことに驚きましたが、サッカーで作った借りを返すためには、今ここにある細いサッカーとの縁を再び自分に結びつけなくてはなりません。僕は新しい夢をつかむべく、自分の持てる力を十分

發揮し、合格者十名の中に残りしました。ところが、合格したのにもかかわらずシンガポールまでの交通費などは自腹だと知らされました。少し考えましたが、ここでプロになるチャンスを失うわけにはいかないと思い直し、シンガポールへ飛んだのです。

シンガポールに着くなり、日本人の候補メンバーの中から僕と渡邊一平（元日本代表ディフェンダー）さんの二人だけチームのポロシャツを着させられ、記者会見に臨みました。それなりに注目を集めていると感じ、必ず採用を勝ち取るぞと思ったのもつかの間、僕だけが呼び出されました。

「うちのチームには元オーストラリア代表のミッドフィールダーがいるから、同じポジションの君は採用候補から外させてくれ」

練習に参加することもできず、いきなり選考外となってしまうのです。あまりに急であつげにとられるしかありませんでしたが、日本でみんなに「シンガポールでサッカーをしてくる」と言つて出てきた以上、引くに引けません。そこで、コーディネーターに「いろんな

チームを見てみたいから、練習だけでも参加させてもらえるチームはないだろうか？」と頼み、探してもらおうことにしたのです。

すると、シンガポールリーグのクレメンティ・カルサというチームが、下部組織として日本人学校の生徒たちを主な対象にした少年サッカーチームを作ろうとしており、そこへコーチとしてきて欲しいという打診を受けました。下部組織とはいえ、練習場所はクレメンティ・カルサが使っているスタジアム。移籍先の候補としてクレメンティ・カルサも狙っていましたし、ほかのチームのトライアル、いわゆる入団テストを受けてもかまわないという話だったので、それならいいだろうと引き受け、いったん帰国することにしました。

僕がシンガポールに行つてサッカーを言うと聞いた時、十人中九人は「何しに行くんだ？ Jリーグでもう一回探せよ」と真顔で心配してくれました。しかし、当時の僕には「これらのサッカーはヨーロッパや南米だけでなく、必ずアジアの時代が来る」と、確信に近い変な自信があったのです。ただし、その道は平坦ではないことは容易に想像できました。だからこそ一、二年で帰ってきたとしたら「ほら、やっぱりアジアでサッカーなんて無理なんだ

よ」と言われてしまう。ならば言い出した以上、十年は帰ってこないくらいの気持ちで飛び出ていこう。サッカーとアジアで心中するくらいの気持ちでやり遂げよう。そう固く心に誓いました。そして、自分の甘さから生まれる過ちを繰り返さないため、最低限の荷物と現金だけを持って、日本を後にしたのです。